

腹痛の春

ミコイ「・・・そういえば、ちょうど一年前の今日、かな、この街に上京してきた日は。上京した絶対的な理由なんかなくて、ただ学校卒業して地元にいっぱなしだとその先一生外に出なそうな漠然とした不安があつて・・・だから明確な夢を抱いてやってきたとかそんな大それたあれじゃないんだけど、とにかく入所金さえ収めれば100パー受かると言われた専門学校に通うことになった」

カオリ「どうしたの？大丈夫？」

ミコイ「そう声をかけてくれたのは、この先唯一の親友となるカオリだった。右も左もわからず専門学校の正門前でほぼパンツ丸出し状態でうずくまっていた私に声をかけてくれたのが始まりだった。目立ちがり屋の父と、引っ込み思案の母から生まれた私は、「目立ちたがりだけど引っ込み思案」というめんどくさい性格で、だから、いざ入学式とか何かきばらなきゃいけない節目には必ずと言っていいほど胃を痛めてうずくまった。そんな私の性格と、カオリは真逆で

カオリ「あああああああ、もうう、またイヤホンの紐、絡まってこま結びになっちゃったよおおおおお」

ミコイ「とか」

カオリ「あああああああ、（アドリブでなんか面白いこと）」

ミコイ「とか何かにつけて感情を表に出すわかりやすいタイプだった。それ以降、凸凹コンビとクラスでは言われ、カオリが太陽だとしたら私はそのあかりで照られされる月。だから居心地がよかった。何でも話せた。大好きだった。だけど、たったひとつだけカオリに嘘をついた……。それはカオリに初めて真顔で相談された時だ……。」

カオリ「ねえ、ミコイって、好きな人とかいるの？」

ミコイ「え？なんで聞くのそんなこと？そういうカオリはどうなの？」

ミコイ「(独白)と質問に質問で返す、会話で一番やっちゃけない私の回答に、カオリは嫌な顔一つせず」

カオリ「私、好きな人できたかも！」

ミコイ「とむしろ聞いてほしそうなフラグを立てていた。恋愛話は正直苦手だった。基本昔から受け身で、自分から告白したこともないし、告白されてもどう返事しかわからず、結果的に放置という状態で相手が痺れを切らす、というパターンだった。だから私の恋愛話には面白みがなかった。」

カオリ「ミコイ、これ絶対しゃべんないですよ！絶対誰にもしゃべんないですよ！」

ミコイ「大丈夫だよ」

カオリ「もししゃべったら安全ピンで口閉じるよ」

ミコイ「全然安全じゃないピンだよ、それ！言わないって。だいたいカオリ以外喋る人いないし」

カオリ「(耳元でこそこそ)」

ミコイ「え、何？くすぐったさだけしかないんだけど、もうちょっとちゃんとしやべってよ」

カオリ「(耳元でもぞもぞくちよくちよ)」

ミコイ「くすぐったいって！ちゃんと書いてよ」

カオリ「(■ ■ ■ くんという名前を言う)

ミコイ「え、■ ■ ■ くん!？」

カオリ「声でつか!し!し!」

ミコイ「ど、どこが好きなの?」

カオリ「いや、どこって言われてるとあれだけど、正直、最初とか全然好きとかじゃなかったし。むしろ、なんかチャラそうだから苦手なタイプだなあって思ってたんだけどね。こないだの月曜、夕方急にどしゃぶりになったじゃん。その時まだ学校にいたのね、傘ないし、どうやって帰ろうと思ってた時にたまたま■ ■ ■ くんから連絡きたから、今から傘持ってきてよって冗談半分にしたの。そして本当に傘もってきてさ。あの人、めちゃくちゃ家遠いんだよ、そっからわざわざきてくれて。とかそういうのがあれこれあって」

ミコイ「(独白)カオリが好きになったという■ ■ ■ って男子は、私と同じ地元で一緒に上京してきた仲間だった。高校ではそれほどしゃべらなかつたけど、進路

の話題が出始めた三年の冬。クラスのみんな ほとんどが地元で就職という選択肢を選ぶ中、私だけ上京希望かと思いきや、■■くんもそうで、だからそれ以降、やけに親近感が湧いて話すようになったっていうか。【都会に住むならどこエリアがいいのか】、【どこの専門学校がいいのか】とかあれこれ教えてくれて、この学校を進めてくれたのも実は■■くんだった。

カオリ「■■くんってさ、誰かと付き合ってると思う？」

ミコイ「さあ・たぶんいないんじゃない？」

カオリ「ほんと！？じゃ応援してくれる？」

ミコイ「そりゃするでしょ。全力で応援するよ！」

ミコイ（独白）：なんて思わず言っちゃいましたけど、正直な話、カオリから、

■■君のこと好きだって聞いた時、なんだか嫉妬心が湧いて、で、お恥ずかしい

話、その時ね、その時初めて、あー、そうか、私って■■■のこと好きになってたんだって気がついたんだ・・・」

カオリ「けど、ライバル多いから参っちゃうよね。」

ミコイ「ライバルって、恋敵ってこと」

カオリ「そう、だって■■■くんってさ誰にでも優しいからさ、絶対勘違いしちゃう女子いるそうだもん。でしょ？ミコイくんはそう思わんかね？」

ミコイ「(独白)確かにそうかもね…。(独白)なんて笑ってごまかしたけど、私もその中の一人だったんだ。確かに昔から優しいんだよな。

カオリ「とか言っても始まらないからね。あたって碎けるよ！フォロー頼んだ！」

ミコイ「(独白)さあ、そっからのカオリのフラグの立て方がすごかった」

カオリ「ね、駅前は今度パスタ屋できた知ってる？行ってみたんだよねえ」

ミコイ「とか」

カオリ「■■■くんってカラオケとかでどんな曲歌うの？え、ほんとに？聞いてみたい！」

ミコイ「などと怒涛に続くアピールを遠目から見守っていた。恋をしたら綺麗になるって言うけど、あれ本当なのかな。私はそういう感覚はわからないんだけど、確かにカオリはエネルギーがすごかった。もともと強いパワーの持ち主なのに、なんかもう、毛穴から変な、もわーんとしたもん出まくってた。だけどそんなエネルギーが数日後、凍りついたようになるなんて思ってもみなかった」

カオリ「(暗い表情) え、なんで言ってくれなかったの?..

ミコイ「..何の話?」

カオリ「何の話じゃなくて、ミコイって■■■くんから告白されたんでしょ?」

ミコイ「あ..えっと」

カオリ「嘘つかなくていいよ、本人がそう言ってたんだから。え?なんで教えてくれなかったの?応援するって言ってくれたのに。バカみたいじゃん。ピエロじゃん。言っつてよ先に!」

ミコイ「(独白) カオリが怒るのも無理ないよね、ごめん、でも言えなかったんだよ。■■■のことも好きだけど、同じくらいにカオリのは好きだったから

「ごめん、・・・なんか一人でお祭りみたいに騒いで・・・馬鹿みたいだよね・・・

ごめんほんと・・・ごめん本当、しかでてこないや・・・」

ミコイ「その言葉を最後に、カオリから連絡はなかった。学校でも見かけなくなっていた。完全に嫌われた、と思った。何度か連絡を取ろうと思ったけど、何をどう切り出していいかがわからなくて、結局、電話を持ったところで終わる。そんな繰り返しの日々が続いた。それからさらに数日後、カオリの番号から着信があった。電話を取ると、聞こえる声はカオリじゃなく、カオリのお母さんで、カオリが入院していると教えてくれた。学校の帰り道、大通りでトラックにはねられたと。私は瞬間的に一番最悪の状況が脳裏によぎって、教えてもらった病院の場所に駆けつけた」

ミコイ「(探してる様子) か、カオリ！カオリー！」

カオリ「(寝ているようで目を開ける)・・・え、なんで来たの？」

ミコイ「何でって言われても。カオリんとこのお母さんから連絡もらって、この

病院に入院してらってそれで」

カオリ「いや大きだよ。トラックに跳ねられて、10メートル飛んだだけだよ」

ミコイ「10メートルも飛んで生きてたんだ!？」

カオリ「平気だって、両足複雑骨折した以外は。」

ミコイ「両足複雑骨折した時点で平気じゃないよ、ちつとも。ちゃんと教えてよ、
そういうこと」

カオリ「・・・教えて・・・か。ちゃんと教えてくれない人に？」

ミコイ「(急にテンション下がり)・・・そうだよね、ごめんね・・・。」

カオリ「なんてね、おあいこってことにしよかな」

ミコイ「え・・・」

カオリ「ほんととは知ってたんだ。■■■くんがミコイの事すぎだったの・・・」

ミコイ「・・・」

カオリ「だからミコイに聞いたんだよ、好きな人いる? って。確認したくて。けど応援するって言うてくれたからさ。じゃ大丈夫なのかなって思って。ガンガンアピールしたけど、やっぱそこに割って入ろうとしてたからバチがあたったのかな」

ミコイ「告白はされたけど、別に付き合ってるないよ」

カオリ「え・・・なんで？ミコイも■■君のこと好きなんじゃないの？」

ミコイ「・・・好きかもだけど・・・付き合わなくていい」

カオリ「え・・・バカなの？」

ミコイ「バカかな・・・」

カオリ「クソバカだよ、なんで付き合わないの!？」

ミコイ「なんかライバル多そうだし。何考えてるかわかんないし」

カオリ「いや、そんな理由で」

ミコイ「それよりね、こうやってカオリともう一回しゃべれる方が嬉しい

カオリ「遠慮しなくていいよ、もうお互いぶつちやけたんだしさ、ちゃんと勝負

しよ。正々堂々と」

ミコイ「え、それ恋敵みたいになるってこと？」

カオリ「そうだよ、改めてよろしくまして！」

ミコイ「うう、またお腹痛くなってきた・・・」